

# みづゑ 第七

明治三十九年一月三日發售

## 色彩應用論

天空。空氣。雲。

榕村主人

空間及空氣を藝術の語ては天空といふ。此天空の色を繪具に寫すのは甚だ困難のものである。これを寫すに當つては、天空は藍色の穹形であるといふ觀念を去つて、單にこれに似通ふた色彩で模寫せればならぬ。空氣そのものは見るべからざるもので、水蒸氣などが加つて初めて見えるのである。で天空は平地よりは高地で見る方が濃厚に見えるのである。空間を模寫するには其空間に雲や霧があるので、甚だ便利でこの雲や霧が地面と天空との調和を計つて居るのである。水の如きも亦これと同じである。空氣も水も共にこれを透して見れば、その物の色を變ずるものである。

空氣や天空を描くには油繪具よりも水繪具の方が便利であるのは水繪畫家の僥倖である。實に近代水彩畫は此點に於て他に優る處がある。

雲に就ての藝術的研究を始むるに先立つて、雲の現象の原因を極むるの要がある。それは何んな雲が何時何處に現はるかを知るが爲めである。この雲や空の觀察は土俗の人の經驗に依つて得ることがある。雲の通常の區分をいふと、天氣の晴期な時に高く薄い雲の現はるゝのを卷雲といふ。次は積雲で、上の方が圓く、下が程好く平である。この雲は午後に現はれて、夕陽に對して甚だ美しい形と色とを現はすのである。この雲は多くは晴天に限るが、層雲と伴ふと常に雨となる。で層雲即第三雲は夕方の水蒸氣が沈んで、低い處

に出来る雲である。

巻積雲俗に青魚雲といふのは、甚だ美しい。これも雨を示すもので、日光の多少に依つて濃淡がある。此雲は空中を飛散し行くものであるから、畫家たるものは精密な觀察をして筆を下さなければならぬ。

コンステールブルの研畫日記を見ると、空氣の爲めに起る結果を研究するに、筆と繪具ばかりでなく、チヨクヤ色紙等までも用ゐて、迅速なスケッチをした事を記してある。

空氣の調子を容易に現はすには、色彩を一抹したのを乾くを待つて、これを水で靜かに洗ふのである。しかし猶自然の調子を模するに充分でなければ、そのスケッチの裏に覺書を記すも一法であらう。

初學者の參考の爲に、左に空氣の灰色エリアルグレイの表を掲げる。聊かこれに依つて得る處もあるであらう。

空氣の灰色表

コバルドブリユール

- 1 クリムゼンレーキ
- 2 ライトレット
- 3 インヂアンレット
- 4 ブラオンマダー
- 5 ライトレットとブラツク
- 6 セビア

フレンチブリユール

- 7 クリムゼンレーキ
- 8 ライトレット
- 9 インヂアンレット
- 10 ブラオンマダー
- 11 ライトレットとブラツク

インヂゴト及コバルト

18	17	16	15	14	13	12
セピア	ライトレツドとブラツク	ブラオンマダー	インヂアンレツド	ライトレツド	クリムゾンレーキ	セピア

猶これを全性質の色彩と換ゆるも宜しく、この場合にはその用ゆる割合に變化がある。例之はクリムゾンレーキの如き力を弱くし、更に純清を望む場合はローズマダーかマダーカーマインを換用する。力を強くするには、パープルマダーを用ゆる。ライトレツドの換りにはヴェネシアンレツドを用ゆる。また純清の赤即ち黄味を帯びない、混交して綠色を呈さないものには、ブラオンマダーやパープルマダー等がある。

前表に關して、諸色の用法を左に説くべし。畫紙の準備として第一の着色は天空、雲、遠景等にはエローオークルとブラオンマダーとの適宜の分量を混合したる、ニユートラルオレンヂを用ゆ。

天空等に頗る純清を要する場合は、カドミウムとローズマダーかマダーカーマインを用ゆ。

これに暖か味を加へんには、ライトレツド、ヴェネシアンレツドまたはインヂアンレツドを淡彩傳色す。

第一の着色が乾いた上で、豫望の調子を得んが爲めに、<sup>ブルーイッシュ</sup>帶藍の灰色を塗るのである。猶ほ思ふ通りの色となるまで、コバルトや他の純粹なブリユーを幾度も重ねて塗るのである。すると光線の部分は他の豊富な色と對照して明になる。水彩畫に於てはコバルトは空氣や遠方を描くには最も必要なもので、時にはインヂゴトの少量を混じる。

着色に綠色を帶ぶるときは、ローズマダーかクリムゾンレーキを淡彩し、またはフレンチブリユーを塗る。

